**令和５年９月１６日**

**日本剣道形立合前後の作法**

**１．入　場**

下座から入場、打太刀右側、仕太刀左側に位置し、演武場に一礼の後、仕太刀は打太刀に従って座礼の位置に進む。

1)　上座と下座について

道場には、上座、下座の定めがある。神様が祀ってあればそこが上座。なければ師　　　範席が上座。それを横にして遣うところもある。その場合、奥が上座で出入口が下座　　　である。 　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 「剣道研究書」より

体育館などの場合は、国旗あるいは団体旗が掲揚されている方が上座、またはメイ　　　ンテーブルが置かれている方が上座である。

2)　剣道形演武の場合、師の位である打太刀が上座、弟子の位の仕太刀が下座に位置するのが古来からの慣例である。

3)　剣道形解説書註に「打太刀を上座に向かって右側にしなくても良い。」について、　　　　剣道形制定当時は「尚左の文化（天皇が南面した時に左側を優位とした）」の時代　　　であったために、上座に向かって右側に師の位である打太刀が位置した。

　その後、大正４年大正天皇即位の礼の時、国際慣例としては、上座に向かって左側　　　が優位であったために以後、公式行事は「尚右の文化」に変わった。これらを勘案し　　　て解説書制定の昭和56年に「必ずしも打太刀を上座に向かって右側にしなくても良　　　い。」の文言を明記したものと思われる。

**２．歩き方**

　右手に太刀（小太刀）を持ち、左手は体側よりやや内側（前）におき、振らないようにして「すり足」で姿勢正しく前方を注視して厳かに歩む。特に太刀を持った手は振らないように注意する。剣道形における足捌きは、すべて「すり足」である。

**３．太刀・小太刀の携行時の持ち方**

　右手親指と人差し指で小太刀を持ち、人差し指の右側と残り三指で太刀を持つ。二刀は、刃を上にして平行に持つようにする。鍔は、太刀の鍔が小太刀の鍔の上になる。

**４．座礼の位置**

特に限定はしないが、下座中央が望ましい。双方約三歩の距離で向かい合って正座する。

**５．座り方、立ち方**

袴の裾捌きはしないで、左の足から座り、右足から立つ「**左座右起**」の礼法に従う。座る時や、立つ時は必ず爪先立て踵の上に尻を置いて立ち、また**座る跪居の姿勢**をとる。

【参考】

　1)　左座右起の形式にすべての武道が統一されたのは、昭和８年に大日本武徳会が、この方式に統一する指令を出して以降のことである。それ以前は上座の足から座り、下　座の足から立つのが原則であった。　　　　　　　　　　　　「剣道辞典」より

2)　同格の人が向かい合って座る時は、お互いに上座の足を半歩退いて座る。下座の足を前に踏み出して立ち、上座の足を下座に揃える。　　　　　　「小笠原流」より

**６．正　座**

　上体を両足の親指を重ねた上に姿勢正しく（左右に傾かず、鼻と臍が対し、耳と肩とが対す）腰を落とす。両膝の間をやや開き（男性の場合は一握りか二握り、女性の場合はつけた方が良い。「小笠原流」より）指は開かず、両手を自然に腿の上に乗せ、呼吸を整えて静かに座る。

**７．太刀・小太刀の置き方、把持の仕方**

　1)　特に明示されていないが、丁重に扱うために正座の後、左手に小太刀を持ち替え、右手で太刀を鍔が膝頭と平行、刃を内側にして静かに置く。鞘走りに注意して丁重に扱うため左手を添えても良い。

2)　右手で小太刀を持ち、左手に持ち替え、次に太刀を右手の人差し指の外側に三指で握った後、左手から右手の親指と人差し指に小太刀を握り替え、二刀を持つ。尚、その際には、太刀の鍔が上にし、刀身を合わせること。

**８．座礼の仕方**

相手に注目し、上体を前方に傾けつつ、両手を同時に床につけ、頭を静かに下げる。

武道的見地から、利き腕がすぐに使える心構えが大切である。上体を前傾させる時、臀部を上げたり、襟がすかぬよう、顎が浮かぬようにする。

**９．立合の間合への移動要領と小太刀の置き方**

1)　打太刀は、立合の間合（およそ９歩）に自然歩行で進み、仕太刀を待つ。

2)　仕太刀は、立合の位置から右（左）後方約５歩のところに下座側の膝をつき、太刀　　　　を左手に持ち、右手で小太刀の刃部を内側に演武者と平行に置き、太刀を右手に持　　　　ち替える。

**10．提刀の仕方**

刀の刃部を上に柄を前にして鍔元近くを右手に持ち、切先を後下がりに体側近くに提げる。

**11．立礼の仕方**

　1)　双方立合の間合に進んだ後、揃って上座に向かって上体を**約３０度前**に傾けて礼を行う。

　2)　お互いに向い合い、上体を**約１５度**に傾け注目して礼を行う。目礼である。

**12．帯刀の仕方**

1)　**刀の場合は**、鍔に右手親指をかけると同時に左手で鐺(こじり)を持ち、鐺を腹部中央に送って、左手親指と人差し指で分けた帯の間（外二重、内一重）に入れ（左手を左帯に送り、最後に結んだ袴の前紐の上に鞘がなるようにし）、右手で**鍔が臍の前にくるように差し込む。**刀を差した時、左手を鍔元に添えて親指を鍔にかける。

　2)　**木刀の場合は、**体のおおむね中央で左手に持ち替えると同時に親指を鍔にかけ、腰にとり、**柄頭が正中線になるようにする**。

3)　親指を鍔にかける動作は、鯉口を切ること、刀を相手から抜かれないようにすること、鞘走りを防ぐことのためである。

**13．抜刀の仕方**

1)　蹲踞しながら左斜めから抜き、横手あたりを交差させて抜き合わせる。体は右自然体である。極端に振りかぶり、または横から抜かないようにする。

2)　**小太刀の場合は**、抜き合わせると同時に**左手の親指を前に栗形部分を軽く押さえる**。**木刀の場合は、左手親指を後に四指を前にして腰にとる。**

**14．納刀の仕方**

1)　左手で鯉口を握り、鞘を水平にする。刀の鍔元近くの棟を鯉口にあて、刀が横一文字になるよう右肘を右方に伸ばして、切先を鯉口に入れる。右手で刀を納めつつ鯉口を握った左手を少しずつ前に引き出し、左・右両拳が接するように納刀するのが一般的である。

2)　木刀の場合は、蹲踞の後、左上方から静かに納刀する。

**15．脱刀の仕方**

1)　左手で刀をわずかに右前に押し出しながら、右手を左手の内側に送り、右手の人差し指を鍔にかけて、残りの四指で鯉口近くを握る。左手を左帯に送り、右肘を伸ばして脱刀する。

2)　木刀の場合は、体の中央で左手から右手に移し、両手を自然に提げ、提刀姿勢となる。

**16．太刀の形が終わった時の動作**

1)　打太刀は、仕太刀が小太刀を取りかえる間、太刀を右手に持ち、柄頭を内にして、右腿の上に置き、蹲踞して待つ。

2)　仕太刀は、後ろ退りに小太刀の置いてある位置に移動し、下座側の膝をついて太刀を小太刀の外側に置き、小太刀を持ち、立合の間合に戻る。

**17．演武終了後の作法**

1)　打太刀は、上座への礼の後、自然歩行で座礼の位置に戻り、仕太刀を待つ。

2)　仕太刀は、後ろ退りに太刀の置いてある位置に移動し、下座側の膝をつき、小太刀を左手に持ち替え、右手人差し指外側三指で太刀を握り、小太刀を右手親指と人差し指で握り、両刀の刀身を合わせ持ち、座礼の位置に行く。

3)　座礼の後、双方刀を持ち、立ち上がり、仕太刀は打太刀の進路をあけ、打太刀に従って退場する。仕太刀は打太刀の下座に位置し、演武場に一礼、総ての演武が終わる。